



# 小児外科だより

記 小児外科 医長 谷 守通



## 『小児外科』ってご存知でしょうか？

「“小児外科”、聞いたこともないよ。」という方、結構多いのではないのでしょうか？私は、皆さんあまりご存じない診療科だと思っています。“外科”と付くからには当然手術をしているわけです。ところが、大学の『小児外科』外来で、術後の患者さんのお母さんに「小児科で手術をした。」と言われたことがあります。ビックリして聞き直したのですが、『小児外科』の外来に来ているのもご承知なのに、なぜか手術は『小児科で受けた』と思い込んでおられました。また、手術室のスタッフに、間違えて“小児科の先生”と言われることも度々です。

小児外科は、他科に比べて受診される患者さんが少ないことや、手術で完治するスッキリした病気が多いためか、よく知られていないのが現状です。日本では小児医療が軽く扱われてきたことも問題でしょう。

そこで今回は、あまり知られていない『小児外科』という診療科について、お話したいと思います。小児科同様に、日々、幼く尊い命に対する責任感と覚悟をもって仕事に取り組んでいる医師の思いや仕事について、ご理解いただけると幸いです。



## 『小児外科』って何やってるの？

### 小児科と小児外科の違い

- 小児科 → 小児の内科
- 小児外科 → 小児の一般外科

### ●小児外科の主な対象領域 **腹部、呼吸器、<sup>けいぶ</sup>頸部（首）の外科**

対象疾患例

#### <消化器疾患>

先天性消化管閉鎖、先天性胆道<sup>\*1</sup> 拡張症、胆道閉鎖症、急性虫垂炎<sup>\*2</sup> など

#### <その他>

頸部嚢胞<sup>\*3</sup>、肺嚢胞性疾患、<sup>おうかくまく</sup>横隔膜疾患、胸腹壁<sup>\*4</sup>異常、鼠径ヘルニア<sup>\*5</sup>、停留精巣<sup>\*6</sup>、胸腹部の外傷など

### ●対象外の領域 **心・血管、脳、整形外科など**



小児科は小児内科と考えてください。小児外科は小児の一般外科で、腹部・呼吸器・頸部の外科が主です。小児は体の生理も、サイズや対象疾患も、成人の外科とは全く違い、胃・大腸などの消化器がんはめったにありません。後腹膜<sup>\*7</sup>や肝臓、腎臓などの小児固形がん<sup>\*8</sup>の手術は行います。

また、小児泌尿器科領域も扱う施設が多く、当科でも水腎症<sup>\*9</sup>や膀胱、オチンチンなどの手術を行っています。白血病など小児外科で手術をしない悪性腫瘍のこどもにも、特殊な太い点滴チューブを入れたりします。消化管や泌尿器系の様々な造影検査や内視鏡検査なども行い、一部は消化器内科的なこともしています。

他には、こども病院以外には小児専門の外科系診療科がないため、こどもの手術や手術前後の管理に不慣れな各科にアドバイスをしたり、複数の診療科の調整をしたりするのも重要な仕事です。



このように小児外科は、小児医療の外科分野で大きな割合を占めています。



### 小児外科の手術イメージ

※手術用ルーペを使って手術しているところです。執刀ではありませんが、私も助手として写っています。

- \*1 胆道(たんどう) … 胆汁(肝臓で作られ、脂肪の消化を助ける消化液)を十二指腸に運ぶ経路のこと。
- \*2 虫垂炎(ちゅうすいえん) … 虫垂(右下腹部にある、大腸から出ている細長い器官)に、炎症が起きている状態。俗にいう盲腸のこと。(盲腸という腸管はありますが、病名はありません)
- \*3 嚢胞(のうほう) … 身体の中に形成された、液体が入った病的な袋状のもの。
- \*4 胸腹壁(きょうふくへき) … 胸やお腹の壁。
- \*5 鼠径(そけい)ヘルニア … 足の付け根である鼠径部に、腸など内臓が飛び出す病気。
- \*6 停留精巣 … 精巣は、胎児期に腰のあたりから陰囊(精巣などを内部に含む袋)まで下降し、出生時には陰囊内に位置する。これが途中で止まった状態。
- \*7 後腹膜(こうふくまく) … お腹の壁の一番内側を覆う腹膜のうら(外側)。
- \*8 小児固形がん … 白血病のようながんではなく、体の中でかたまりを作るこどものがん。
- \*9 水腎症(すいじんしょう) … 尿の流れる道の異常により、腎臓の尿を集める腎盂、腎杯という部分に尿がたまり、腫れた状態。



## こどもの未来

“小児外科”のことを少しはわかっていただけましたか？ **こどもたちの可能性は無限大です。** 少子化が進む現代日本社会では、**こどもの重要性は更に増加しています。** 将来を担うこども達に質の高い医療を提供し、患者さんや家族の生活の質の向上を図り、体の負担が少なくより安全で、将来まで考慮した手術術式、より目立たない手術のキズ、手術にこだわらない治療方法などを追求し、こどもの可能性を阻害しないように、小児外科、小児科の枠にとらわれず、**こどもの明るい未来のために最善の医療を行いたいと考えています。**

